

2026年6月21日（聖霊降臨後第4主日、A年特定7）

メッセージ

「恐れ」

（マタイによる福音書10:24-39）

司祭ヨセフ太田信三

先週の福音で、主イエスは弟子たちを派遣するにあたり、次のように言われました。「私はあなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り込むようなものである。」主イエスが言われる通り、狼の群れの中で主イエスにのみ従う羊として生きることは困難です。狼に襲われる恐怖から逃れるために、人はイエスさまよりも他の何かに頼ってしまうこともあるでしょう。恐れの中で、時には自らが狼になってしまうことさえあります。「恐れ」とはそれほど厄介なものです。主イエスはこの「恐れ」の厄介さをよくご存じだったからこそ、今日の箇所を繰り返して「恐れるな」と弟子たちを励まされたのでしょ

う。主イエスはまず、「人々を恐れてはならない」と言われます。なぜなら、「体は殺しても、命は殺すことのできない者どもを恐れるな」とある通り、人は主イエスの体を十字架によって殺すことはできても、その命までも葬ることはできませんでした。「命も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい」とあるように、それができるのは神だけです。人を創造し、イエスを復活させた神だけが、命を滅ぼすことも救うこともできます。だからこそ、いかなる迫害も恐れることはないと言います。主イエスは弟子たちに告げます。

そして、驚くべき福音が続けて語られます。そのすべての命を支配する神が、人間の髪の毛一本までも数えているというのです。自分の髪の毛の数を数えることは人間にはできません。つまり、神が自分自身以上に「私」のことを知ってくださっているということです。

「二羽の雀は一アサリオンで売られているのではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない」とある通り、一羽の雀の死をも神は見過ごされません。その神は、今も未来も、死してなお、私たちに決して放っておかれず、見捨てることもありません。「恐れるな」という主イエスの言葉は、この神への信頼に基づく言葉です。この神が共におられるからこそ、私たちは恐れることはないのです。

しかしそれでも、狼の群れの中で羊として生きることは困難が伴うでしょう。恐れはそれほど強いからです。では、どうすれば良いのでしょうか。主イエスは、「私が暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを屋根の上で言い広めなさい」と言われました。これは、暗闇の中でも祈り、神の語りかけを聞きなさい、ということではないのでしょうか。主イエスは捕らえられる前、ゲッセマネの闇の中で祈りました。神はその主イエスに語りかけ、主イエスはその言葉を聞き、御心に自らを委ねました。この主イエスにならい、私たちも困難の中で祈るなら、神は私たちにも語ってくださいます。恐れの中で耳を塞ぐのではなく、その言葉を聴き、従って歩もうとすることで、私たちはこの世にあっても主イエスにのみ従う羊として生きることができるのです。